

論文の内容の要旨

論文題目 エナクションの現象学：身体的行為としての事物知覚と他者知覚

氏名 宮原克典

本論は、1990年代初頭に認知哲学におけるひとつの立場として提出された「エナクティヴィズム」の考え方をフッサール以来の現象学の観点から展開する。エナクティヴィズムとは、一言で言うならば、わたしたち人間がひとつの生物個体であることに基づいて、わたしたちの認知活動を「エナクション」、すなわち、身体的行為を通じて環境を意味づける働きとして説明する考え方である。しかし、これまでのエナクティヴィズムの議論では、どうしてこのような考え方が有効だと考えられるのか、それどころか、これが具体的に何を意味するのかも、十分に明らかにされてきたとは言いがたい。本論では、経験に対する主観的反省を中心的な方法論にすえる現象学の観点から、認知をエナクションとして理解することの意味と有効性を考察する。この企てを「エナクションの現象学」と呼ぶ。

わたしたちの認知活動にはさまざまな局面があるが、本論では、とくに事物知覚（物を見ること）と他者知覚（他者を見ること）という二つの局面に注目する。したがって、知覚に関してエナクションの現象学を展開すること、すなわち、経験に対する現象学的反省に基づいて、事物知覚と他者知覚をエナクションとして理解することの意味と有効性を明らかにすること、これが本論の第一の目標となる。また、このような議論を順調に進めることができたならば、事物知覚および他者知覚という認知活動に関する理解が

深められるだけでなく、「認知哲学への現象学的アプローチ」ないし「現象学的認知哲学」という方法論の有効性も示されるだろう。これは本論の第二の副次的な目標となる。

本論がエナクティヴィズムの展開を試みる背景には、心を〈頭の中〉に閉じ込める考え方に対する懸念がある。わたしたち現代人にとって、心を〈頭の中〉で働くものだと考えるのは、ごく自然に感じられる。しかし、この一見すると無害な考え方は、心の哲学や認識論の分野において原理的に解決不可能な理論的問題を導くだけでなく、価値相対主義やニヒリズムを動機づけることを通じて、現代という時代の閉塞感の根本的な要因となっている。心を〈頭の中〉に閉じ込める考え方を批判的に検討し、これとは違う仕方では心というものを理解することはできないかと問うことは、このような現状を理解し克服するための手がかりとなるかもしれない。本論は、そのわずかな可能性に期待をこめて、エナクションの現象学という企てを進める。

本論は大きく二つの部分に分かれている。

第一部「事物知覚のエナクティヴ現象学」（第1章から第3章）では、物を見ることをエナクションとして理解するというのがどのようなことであるかを考察し、事物知覚をエナクションとして理解することが、現象学と認知哲学の成果に照らして、きわめて妥当な考え方であることを示す。

第1章では、アメリカの哲学者アルヴァ・ノエの「知覚に対するエナクティヴ・アプローチ」の批判的検討をおこなう。ノエのエナクティヴ・アプローチは、事物知覚を一種の身体的行為として理解する立場を打ち出そうとしているが、いくつかの問題点を抱えている。そこで、知覚を一種の身体的行為だとする考え方を救済するために、フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティの知覚の現象学を参照する。物を見るというのは、事物の不明瞭／未規定的／両義的な現れを明瞭／規定的／一義的なものへと変形させる身体的な過程であると主張して、この考え方を「事物知覚に対するエナクティヴ現象学アプローチ」と呼ぶ。

第2章では、現代の認知哲学におけるいくつかの議論に対して、事物知覚に対するエナクティヴ現象学アプローチの擁護を試みる。この章の前半では、この立場を「視覚運動失調」と「視覚失認」という二つの神経学的症状に基づく反論と対決させる。エナクティヴィズムの知覚観はこの二つの症状と矛盾すると指摘されることがある。それに対して、こうした反論は二つの症状の意義を正確に把握できていないと論じる。後半では、エナクティヴィズムの知覚観の修正主義的な姿勢を標的にした批判を取り上げる。心や認知に関する修正主義には良いものと悪いものがあるという認知哲学者ロバート・ルパートの議論を参照して、エナクティヴィズムの修正主義を容認できないものだと断罪する十分な根拠はないことを示す。

第3章では、事物知覚のエナクティヴ現象学アプローチと、近年の知覚の哲学を賑わせている「知覚経験に関する概念主義」の関係を考察する。アメリカの哲学者ジョン・マクダウェルの概念主義によれば、事物知覚は概念能力の働きに基づいて成り立つ。それに対して、アメリカの現象学者ヒューバート・ドレイファスは、知覚は非概念的な身体的過程であると反論する。この章では、この二つの考え方の調停を試みて、事物知覚に対するエナクティヴ現象学アプローチは、マクダウェルの概念主義とドレイファスの現象学のあいだの相互補完関係を体現した立場だと考えられることを示す。

第二部「他者知覚のエナクティヴ現象学」（第4章から第7章）では、知覚をエナクションとして理解する考え方がどこまで有効であるかを考えるために、他者を見るというのがどのような経験であるかを考察する。他者理解とは必ずしも〈頭の中〉で他者の心を表象することではなく、むしろ、その基本的なあり方は他者との身体的な関係性に基づいた知覚経験にあることを明らかにする。

第4章では、他者理解をめぐる近年の認知哲学の見取り図を与える。他者理解に関する認知哲学の主流派をなす「マインドライディング説」によれば、他者理解とは、他者の言動から〈頭の中〉の状態を推論することにほかならない。それに対して、他者理解に関する「現象学的アプローチ」や「エナクティヴ・アプローチ」によると、他者の心の状態は知覚において非推論的・直接的に把握されることもある（「直接知覚説」）。また、これらの立場によると、他者知覚には、他者との身体的な相互行為の形成に役立つ「相互行為指向モード／二人称モード」と他者の心的状態に関する思考の形成に役立つ「認知指向モード／三人称モード」という二つのモードがある。さらに、エナクティヴ・アプローチによると、他者との身体的な相互行為はそれ自体が一種のエナクション（「共同的意味生成」）として機能することがある。

第5章と第6章では、直接知覚説に対する「暗黙的マインドライディング説」に基づく批判、すなわち、他者知覚とは、結局、暗黙的・無意識的なレベルでの推論に媒介された経験にすぎないのではないか、という批判を取り上げる。

第5章では、他者知覚を素朴心理学に基づく暗黙的な理論的推論を通じて他者の〈頭の中〉に関する内的表象を生成する過程だとする「暗黙的理論説」を取り上げる。現象学の創始者エドムント・フッサールの共感論／感情移入論によると、他者知覚とは、他者の振る舞いについての非直観的な予測が感性的に確証される経験である。これにしたがうと、他者知覚は、他者の振る舞いに関する予期的な表象は含んでいても、他者の〈頭の中〉に関する表象は含まないことになる。それゆえ、他者知覚に関する暗黙的理論説を認めることはできないと結論する。

第6章では、他者知覚に関する「暗黙的シミュレーション説」、とくにミラーニュー

ロン研究の第一人者ヴィットリオ・ガレーゼらが提唱する「身体化されたシミュレーション説」の批判的検討をおこなう。身体化されたシミュレーション説によると、他者知覚は、他者の認知システムの状態が自分のミラーシステムにおいて再現されることによって成り立つ。しかし、ミラーシステムに暗黙的なシミュレーションの機能を見出すことには、いくつかの概念的および実証的な困難がある。そこで、フッサールの理論を二人称モードの他者知覚に拡張したうえで、ミラーシステムは他者の振る舞いに関する状況依存的な予測（他者の振る舞いを自分自身の実践的状况と関係づけた予測）を生成することで二人称モードの他者知覚の形成に役立つのではないか、という新たな仮説を提案する。

第7章では、まず、メルロ＝ポンティの「間身体性」の概念の解釈を通じて、他者知覚において他者の存在が経験される仕組みを分析する。メルロ＝ポンティによると、他者知覚には他者の身体を「主体的客体」として現前させる受け身の次元があり、これがないと他者経験は成り立たない。次に、この見方に基づいて、他者知覚の二人称モードと三人称モードの関係に関するエナクティヴ・アプローチの議論を敷衍する。近年のエナクティヴ・アプローチの議論では、二人称モードは三人称モードよりも存在論的に基礎的であると示唆される。本章では、それは三人称モードの他者知覚には他者を潜在的な相互行為の相手として把握する最小限の二人称的意識が組み込まれているからだ、と考えられることを示す。

以上の議論により、本論では、知覚がこれまでのエナクティヴィズムの議論で論じられてきた以上に多面的な仕方でエナクシオンの働きを含む認知活動であることを示す。より具体的には、現象学に重点をおいたエナクティヴィズムの観点から、（1）知覚経験には「行為指向モード」と「認知指向モード」という二つのモードがあり、（2）知覚の基本的なあり方は行為指向的であり、（3）知覚にはそれ自体が一種の身体的行為であるような局面があることを明らかにする。また、本論の議論は、現象学が心や認知に関する主観的な見解を述べるだけの独断的な方法論ではなく、批判的な検証に開かれた健全な方法論であることを、それ自身が見本となって示すだろう。こうして、事物知覚と他者知覚をエナクションとして理解することの意味と有効性を明らかにし、認知哲学への現象学的アプローチの有効性を示すという二つの目標は達成されることになる。